

平成29年度第5回観察会 記録

日 時	平成29年8月28日(月)～30日(水)	
観察地	三重県鳥羽市～志摩市大王町～答志島	
講 師	江崎 貴久先生 海島遊民くらぶ代表、旅館「海月」女将	
テー マ	海で遊び、海を守る	
備 考	参加者数23名(田中先生、スタッフ藤原・北川を含む)	記録:藤原雄平 北川恵子

はじめに

6月10日の講演会では、鳥羽の魅力を再開発して新たな観光ツアーや起業された、旅館「海月」若女将、江崎貴久先生から熱いトークを聴かせていただきました。現地へ出向いて、実体験して、成果を共感したく、3日間の自然観察会を実施しました。

《第1日目》 天候:曇り

事前配布の近鉄「伊勢神宮参拝切符」で、各自最寄りの駅より、上本町駅発8:50の鳥羽行特急に乗車。途中の名張駅で参加者23名全員が揃った。

旅館「海月」に到着すると、江崎先生はじめ、海島遊民くらぶのスタッフが、シュノーケルのウエア姿でお出迎え。部屋での着替えも慌ただしく、すぐに隣の遊民くらぶの事務所へ。ライフジャケットやアクアシューズなど装備を整えて、足ひれを片手に勇ましい姿で近くの鳥羽港へ出発。5グループに編成して、漁船で沖合10分程度の無人島へ。島の近くに沖着けした船からいきなりシュノーケルで島まで移動。シュノーケル体験は初めての人が多かったが、遊民くらぶのスタッフに見守られながら、海藻の中を泳ぐマダイやメジナ幼魚の群、ベラの仲間のキュウセン、名も分からぬ魚の姿を求めて、それぞれ1時間余、童心に返り楽しんだ。

【シュノーケル風景は遊民くらぶ提供の写真を別添】

旅館に帰り入浴。短い時間のシュノーケルだったが、みんな結構、お疲れの様子だった。

17:30より懇親会を兼ねた夕食会開催、自己紹介を行う。江崎先生は、旅館の女将として艶やかな和服姿で登場し挨拶された。



和服姿も艶やかな若女将 江崎先生

会場を2次会の場所に移して飲み会。参加者の堂下さんの手品の披露もあり、楽しく盛り上がった。

二次会は堂下さんの手品もあり♪♪… →

20:30 鳥羽市内の花火を見に港に出かける人がいて2次会はお開きに。



《第2日目》 天候：晴れ

9:20 4台の車（運転は海島遊民くらぶスタッフ）に分乗して、志摩市大王町へ向かう。パールロード途中の展望台から眼下に広がる絶景を眺めた後、昔ながらの手火山（てびやま）製法で燻り鰹節を作る「天ばく」を訪問。社長の天白さんから、鰹節の製造工程の説明だけでなく、当地の歴史などを聞いた。その間に土鍋で炊いたご飯が炊きあがり、削りたての鰹節をたっぷりと乗せ醤油をかけたおかかご飯をご馳走になった。風味豊かな鰹節の試食の効果もあり、お土産を購入した人も多かった。



昔ながらの製法を守る鰹節工場「天ばく」



土鍋で炊いたご飯に削りたての鰹節をたっぷりかけた「おかか飯」の味付けは天白社長の鰹節への愛情と少しの醤油だけ。

「海女のまち相差（おうさつ）」へ移動し、2人のベテラン海女さんの漁を見学。その後、海女小屋でオオアサリ、ホタテ、サザエなどの焼貝と、先程、海女さんが捕ったアワビの刺身を食べながら、海女さんの話を聞いた。年齢的には我われと変わらない海女さんたちだが、とにかく明るくてパワフル。海女漁の話から嫁に来たころのことまで、楽しく聞かせてもらった。



海女さんの漁を眺めている。もっと近くで見たいが…



お腹が満ちたところで、女性の願いを一つ叶えてくれると、最近特に若い参拝者が増えているという「石神さん」(神明神社)を参拝。自由に中に見つけた境内の大木に「ヤマモガシ」の名札が。誰もが初耳の名前で、スマホで調べると、ホルトノキの別名とのこと。見ると赤い小葉がたくさん落下しており、とりあえず納得。



相差(おうさつ)のまちを歩くと家々の門前に不思議なマーク入りの石が置かれている。これはドーマンセーマンという海女さんが身につける魔除けの印だとか。



短時間のうちに海女さんが捕った大きなアワビ2個は、サザエなどの焼貝とともに、海女小屋でご馳走になった。
焼貝は、海女さんのおやつなのだとか。



女性の願いを一つ叶えてくれると信仰を集める
相差の「石神さん」(神明神社)

17:30 「海月」に帰館し、18:00 夕食。

夕食後、19:30より希望者15名がオプショナルツアーオウミボタル観察に出発。観察場所は車で20分程度の入り江で、帰館は21:30を過ぎたが、懐中電灯の明かりを消し、真っ暗な中で見たウミボタルの神秘的な青い光に、参加者は口々に「見られてよかったです」と感動しきりであった。

《第3日目》 天候：晴れ

9:00 チャーター船で答志島へ上陸。早速、サワラの大量の水揚げが見られるところで魚市場（鳥羽磯部漁協・答志支所）へ行くも、既にセリは終わった後で、数匹が残っているのみだった。午後のセリに再度もどってくることにして、シラスの工場を訪問。まだ湯気の上がっている蒸したてのコエビをご馳走になり、魚の鮮度を保つための活け締めやハモの3枚オロシの作業を見学。一同、漁師さんの見事な手さばきに見入っていた。



現役の海女さんでもあるロンク食堂の女将さんの見事な話術に笑い、また笑い。島の女性はみなパワフルで明るい。

われはお邪魔虫もいいところだが、島の人の眼はみな温かだった。

狭い路地が縦横に張り巡らされているため、どこをどう歩いたか分からぬうちに昼食場所であるロンク食堂に到着。食堂の女将から、答志島が数年前のNHKのプレミアムドラマ「ヤアになる日～鳥羽・答志島パラダイス～」のロケ地であったこと、そして女将さんを含めたたくさんの地元の人がエキストラ出演したことなど、ロケの裏話も含め、おもしろおかしく聞かせてもらった。ちなみに、ヤアとは方言で嫁のこと。ドラマでは「夫婦船」や「寝屋子制度」など、答志島固有の風習が描かれている。



答志島に今も残る「寝屋子制度」について島の人から聞く。海を相手に生きる中から生まれた絆をはぐくむ風習だ。

島内集落の人ひとりが通れる程の細い路地を巡り、今も残る「寝屋子制度」の風習を井戸端ならぬ路地端でおばあさんから聞いたり、島一番のお祭り「八幡まつり」の模擬実演をしたりした。狭い路地を大勢で歩く我わ

食後、魚市場へ再移動。手を消毒し、靴底を洗い、昼のセリ場へと入った。構内は清潔で臭いは全くしない。素人には何が何だか分からぬスピードで、次々と生けすの魚がセリ落とされていく様子は見応えがあった。

鳥羽磯部漁協・答志支所のセリ風景
遠巻きにプロの仕事を見学した。

その後、魚市支所長さんから「優良衛生品質管理市場」の認定を受けるまでの道のりや、答志島の漁業資源を守る取り組みについてのお話を聞いた。「森は海の恋人」思想を深く理解されており、海の森づくり（アラメ場造り）や植樹活動も行っておられるとのこと。答志島の漁業の将来にも明るい展望を語られていた。



「優良衛生品質管理市場の認定を受け、品質を高めることで答志島の魚のブランド化を図り、その貴重な漁業資源の保護にも取り組んでいる」と話す答志支所長さん(写真中央左)。

チャーター船に乗り答志島を後にし、14:00「海月」に帰館。14:35発のなんば行特急に乗車するため、名残惜しくも慌ただしく、江崎先生や海島遊民くらぶのスタッフにお別れの挨拶をして鳥羽駅に向かった。



《感想》

初日に旅館「海月」に到着してから、3日目に「海月」の玄関前で別れの挨拶をするまでの間、江崎先生をはじめ海島遊民くらぶのスタッフの皆さんには本当にたいへんお世話になりました。全てお任せの鳥羽自然観察会でした。シュノーケル体験は内心少し心配でしたが、スタッフのお世話で何のトラブルもなく無事に済みました。参加された皆さんも波と戯れて楽しかったようで、良い思い出にもなったと思います。

3日間、地元のたくさんの人達とお会いし、お話を聞きました。共通して感じたことは、お会いしたすべての方が、明るくて元気なことです。江崎先生が取り組んでおられる“故郷再生活動”に、みなさんが共鳴されていることも良く理解できました。江崎先生のますますの活動を期待し、鳥羽・志摩地区へ多くの訪問者があることを祈る思いです。海で遊び、楽しみ、大いに学んだ旅でした。

(江崎先生たちの地域の隠れた資産を生かして地元の漁業を明るく元気にする観光を目指す取り組みの詳細は「森里海を結ぶ（1）女性が拓くいのちのふるさと海と生きる未来」(昭和堂、2017) を参照ください)

鳥羽自然観察会に参加された皆さんへ

平成 29 年 8 月 30 日 田中 克

8 月 28 日～30 日の鳥羽自然観察会にご参加いただきありがとうございました。今回も天候にも恵まれ、日本の漁村を側面から支え、海と生きる道を多様に広げておられる、江崎貴久さんと海島遊民クラブの皆さんにお世話になって、楽しく見聞を広げることができました。6 月に江崎さんから直接お話を聞いていただけに理解も進みましたし、また、聞くだけではわからない海女さんの仕事とこの上ない明るさや楽天性、今どき珍しい元気な漁村の存在などに感動する機会ともなりました。

今回の鳥羽自然観察会が成立した直接の出発点は、今から 10 年以上前に旅館「海月」で「環境・経済・文明」研究会が開催されたことに遡ります。当時は、環境、経済、文明はそれぞれに“あちらを立てればこちらが立たず”の関係にありましたが、近未来を見据えるとこれらをいかに両立させる（よい関係に高める）かが大事であると議論が重ねられました。その中の一つの重要な基本理念が森里海のつながりでした。その後、江崎さんとは具体的なつながりはないままに、それぞれが森里海連環学の深化、地域の隠れた資産を生かした地域が元気になる観光を目指す道を歩んでいました。再開は偶然にやって来ました。

2015 年 11 月に和歌山県白浜町で「熊野吉野国立公園拡大記念シンポジウム」が開催され、森里海のつながりの講演を行う機会が訪れました。当時すでに環境省の委員を務めておられた江崎さんが来賓として出席され、再会することになりました。それを機会に江崎さんのご活躍を知ることになり、2016 年 8 月に京都で開催した「女性が描くいのちのふるさと海と生きる」シンポジウムに登壇いただき、その講演を元にした「いのちの本」への寄稿、6 月 10 日の自然学講座でのご講演、そして今回の観察会へと結びつきました。

今回の自然観察会は「海と遊び学ぶ」趣旨でしたが、全国的にほとんど姿を消したアカテガニがここでは普通に見られること、鰹節の製造にウバメガシが必須であり、その供給が林業の再生や森の保全につながること、海に潜り続ける海女さんは海の豊かさの源は周辺の森（魚付き林）にあることを当たり前のように認識されていること、沿岸漁業の土台となる藻場の造成（海の森づくり）が進められていることなど、あちこちに森と海のつながりが根付いていることに驚かされました。同時に、潜在的に存在した森と海のつながりをより分かりやすく見える形にする上で、江崎さん達の貢献はとても大きいと感じました。

1989 年に誕生した社会運動「森は海の恋人」、2003 年に生まれた森から海までのつながりの統合学問「森里海連環学」に続いて、2014 年には環境省が本腰を上げて「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトを中心的に立ち上げた環境省審議官（当時）の中井徳太郎さんも「海月」での研究会のメンバーでした。時代は大きく動き出したと思い始めていました。その先駆け的な動きが鳥羽にあることが確認でき、非常に勇気付けられました。皆さんそれぞれに感じるものがあったのではないかと思います。明日を生きる糧になればと願っています。

以上